城山病院特集⑭

椎間板ヘルニアの内視鏡下手術について

低侵襲脊椎センター　副センター長　米井数基医師

2020年2月に設立した低侵襲脊椎センターでは、椎間板ヘルニアや脊柱管狭窄症などの患者様に、身体に負担の少ない内視鏡手術を専門に行っています。その実績は関西ではトップクラス、国内でも有数で、高い評価を受けており、他府県からの患者様や医療関係者の見学も多く受け入れています。米井医師に話を聞きました。

椎間板ヘルニアの内視鏡手術とは

ヘルニアとは「外に飛び出す」という意味があり、脊椎（背骨）をつなぎ、クッションの役割をしている椎間板（軟骨）が外に飛び出して神経を圧迫する疾患が椎間板ヘルニアです。

腰椎椎間板ヘルニアは、腰の激しい痛みだけでなく、足の痛みやしびれも伴います。治療は飛び出している椎間板ヘルニアを摘出する手術を行います。

この手術を内視鏡システムを使って行うことで、患者様の身体への負担が少なく（低侵襲）なります。従来は直径16㎜の内視鏡を挿入して摘出手術（内視鏡下椎間板ヘルニア摘出術 ＭＥＤ）をしていました。

最も低侵襲な手術 ＦＥＳＳ法とは

さらに小さなカメラが開発され、低侵襲な手術法である全内視鏡下脊椎手術 ＦＥＳＳ（旧ＰＥＤ）が２００３年から日本でも行われるようになりました。当院でもいち早くその方法を取り入れました。これは直径約６㎜の内視鏡カメラを使用するもので、具体的には背中に約８㎜の皮膚切開を行い、ここから内視鏡システムを挿入し、モニターを見ながら手術を行います。手術時間は約1時間で、症例によっては局所麻酔で行うことができるため、術後3時間より歩行ができ、日帰り手術も可能です。

頸椎椎間板ヘルニアや腰部脊柱管狭窄症の場合は全身麻酔になりますが、手術当日より歩行可能で、早くて翌日以降の退院になります。

このようにＦＥＳＳ手術は、従来のＭＥＤ手術が全身麻酔で、約1週間の入院が必要だったのに対し、傷口が小さく、身体への負担が少ないため、入院期間も大きく短縮できます。

ただ、この手術は整形外科の分野では難易度が高く、術者も高度な技術が求められるため、実施する医療機関は多くありません。当センターでは、これまで４０００例以上の脊椎手術を行ってきた坪井センター長と私がすべての症例を担当しており、これまで手術を躊躇していた現役社会人の方や、基礎疾患をお持ちの高齢者の方が安心して手術を受けておられます。

センターとしての特性

当センターではＦＥＳＳカメラ3台、ＭＥＤカメラ2台、さらには最先端のオリンパス社製の内視鏡を2段導入しており、お困りの患者様に対して数日以内で手術ができるように体制を整えています。このコロナ禍においても、若干の制約はありますが、入院期間が短いため、ほぼいつも通りに治療を進めています。

当センターではヘルニア摘出術以外にも、圧迫骨折や脊柱管狭窄症の患者様への脊椎固定術、また、頸部脊柱管狭窄症や頸髄症の患者様への椎弓形成術なども行っています。

外来診察は予約なしで受けて頂けますので、左記診療曜日にお越しください。他院で撮影された画像などがお手元にありましたらご持参ください。

手術実績

	2019年	2020年
局所麻酔下経皮的内視鏡手術（PED、FESS）	128 例	171 例
全身麻酔下内視鏡手術（PED、MED）	80 例	100 例
脊椎固定術および椎弓形成術	70 例	100 例

※上記の内容は他院での手術症例を含みます

診察時間及び担当医

担当医	月	火	水	木	金
坪井	○	—	○	—	—
米井	—	—	○	○	—

診察：月曜・水曜・木曜の午前中のみになります。
受付時間：8：30 ～ 11：00